

自然が創作活動に与えるインスピレーションとその還元

藤田敦子・林隆一・北尾真澄・塚原寛裕・田中一秀・
出口友佳子・永田利光・今尾真也 (百科編集部)

はじめに

ジャン・コクトーの有名な詩篇「私の耳は貝の殻 海の響きを懐かしむ」(堀口大學訳)は、「耳」→「巻き貝」→「海」→「波の響き」→ふたたび「私の耳」へと循環していく。古来より人間の営みは自然と切り離すことのできないものであり続け、したがって、この短詩に限らず、あらゆる分野の様々な創作活動にとっても「自然」や「生命」は根源的なテーマのひとつであり、素材となってきた。ここでは、いくつかの創作の実例を掲げ、制作者それぞれのアプローチによる創作活動の中で、どのように「そこにある自然」からインスピレーションを受け、それを消化して、自らの作品創りに取り込んでいったか、また、それらの独立し自立した作品は、いかにして「自然」と「人間」ひいては「ここにある私」との関わりに気づききっかけとなり得ていくのか、そしてさらには、その作品が周囲に与えていく影響について、循環を意識しながら考察を加えてみることにした。

事例

I. 小説『トーマとコーゾーの夏休み』シリーズ執筆と挿画 (藤田敦子・林隆一)

(1) 『夢見るアンモナイト —化石の谷の秘密の冒険—』

2012年の林の個展をきっかけに、林の絵画や立体作品と藤田の文章でコラボレーションができないか、と意気投合して生まれた作品で、「百科」にシリーズ掲載。

アンモナイトを想起させる渦巻きの殻とうずくまる少年の小さな塑像からイメージしたのは、東京から地方都市(むろん岐阜近郊をイメージ)へと引越し・転入してきた小学生のトーマである。父親がイギリスに単身赴任中で、母親と二人暮らしだ。都会っ子で少しませたところもあり、シニカルな物の観方をし、ひとりで思索にふけるタイプなのだが、地元のわんぱく少年コーゾーと友達になり、コーゾーがその祖父と秘密を共有している化石が発見される谷へと遊びにつれていかれる。単純だが実践派のコーゾーとの交流や冒険を通して、その成長を描く。

小説を読んだ林が、イメージイラストをボールペン画で仕上げた。林は二紀本展優賞・奨励賞・中部二紀賞などを受賞する画家であり、大作においては、コーヒーとコラージュ、ボールペンを主に用いる。

(2) 『星降る夜に —まぼろしの隕石を探せ—』



前作の『夢見るアンモナイト』で作りに出した「トーマ」と「コーゾー」というキャラクターが動き出したので、第2作を制作。今度は小説を先に執筆。

「星見ヶ丘団地」の裏山にある「星ノ宮神社」のご神体が隕石だという噂から、その周辺で隕石探しをしよう、というお話。山村にあるコーゾーの祖父の家を秘密基地にするふたり。隕石を起点に、宇宙や存在について、また、自分が今あることについて夢想するトーマを描く。

「百科」では前後編での掲載としたので、林によるイメージ画も2種類となり、特集も、第2号では隕石そのもの、第3号では隕石にまつわるものとした。



(3) 『こごえる翼 —サマーキャンプの登山教室—』



制作は終えているが、未発表の『トーマとコーゾーの夏休み』第3作。題材はライチョウ。エリアのモデルは噴火前の御嶽山。

夏休みに参加した民間のサマーキャンプで、ふたりは高山の登山に初挑戦。ボランティアガイドがリーダーである。前夜に山の話聞いた翌日の登山で、ライチョウの親子を見かけるが、喜びも束の間、カラスにヒナの1羽が食べられてしまうのを目撃する。ライチョウを通して、食物連鎖のことや里山の動物が高山へも進出していることなどを学び、「生きる」ということはどういうことなのか、考える様子を描く。

林のイメージ画は、あえてライチョウそのものにならないように表現をすることにこだわり、かなり苦労した1枚だったという。

II. 海岸漂着物を使用・造形した立体作品と、それに着想を得ての詩の創作(林隆一・藤田敦子)

林には、二紀展への出品を中心とする絵画作家のほかに、立体造形家としての顔がある。粘土なども使用するが、流木や海岸への漂着ゴミなどを利用した作品も多い。下掲の『残響』もそのひとつである。もとの「物」が持っていた「命」というか「役割」といったものが一旦終わり、それが流れてくるまでの時間と空間をその中に取り込んで、別の「モノ」へと蘇生させていく。いや、別の物という言い方はちょっと違うだろう。それが辿ってきたすべてを内に抱え、作者の無意識の時の蓄積をも取り込んで、ひとつの形へと変容させていく。

コウイカの骨を使った『Dignity』では、作品説明の際に「コウイカの骨」についての話も交えると、子どもたちから「イカの顔」や「イカに目がある」といった感想も出た。このことから、作品は自然を身近に感じる手助けとなることが伺えた。双方向の相乗効果である。また、流木の作品『時の支配者』では、藤田が造形作品から着想を得て、現代詩を書き、プロのアナウンサーによる朗読で発表することができた。

▼『残響』(部分) 林隆一 (撮影: 寺島 真希)



▼『Dignity』



『時の支配者』

わたしは、かつて濃い緑の生い茂る大地に、生まれました
それは、遠い遠い昔の話です

そこでは、
あなたが見たこともないような植物の群生が、
風をブランコがわりにして枝々をゆらし、
じりじりと照りつける太陽が、
朝から晩まで、わたしの肌を灼いていました

.....

そんな話も、今は遠い昔のこととなりました
ほんとうに、季節がめぐるのは速いものです

花咲く春もありました
凍てつく夜もありました
おだやかなほほ笑みの絶えない日々もありました

——そして、いくつもの戦いもありました
いくつもいくつも、ありました

.....

わたしは、それらを越えて
ながい旅路を流れてきたのです

ゆるやかな流れにのって
荒れくるう重いうねりに、身をさらし
打ち寄せる波に、ただよいながら

今はもう
わたしを思い惑わすものはありません

.....

しずかに……

そうです
ただ、しずかに時が流れていくのを
見まもりつづけることが、わたしのしごとなのです

だから、こうして、
わたしはあなたの前に姿を現したのです
まぼろしではなく
これが、わたしのすべてなのです

生きてきたすべての時をきざんだ
わたしのからだなのです



Ⅲ. 野の植物のアレンジメントで「誕生」「共生」のイメージを創る (北尾真澄・塚原寛裕)



百科初号の企画として、「タンポポ調査・西日本 2015」に滋賀県の琵琶湖博物館への協力という形で、滋賀県東部の米原～岐阜県西部の関ヶ原までのタンポポを調べてまわった。その中心メンバーがフラワー・アレンジメント講師でもある北尾であり、自然環境調査員の塚原である。

北尾は、自然のままの植物の美しさや楽しさを知ってほしいと「百科」に参画。在来種タンポポを用いて、卵から萌え出づる春と力のイメージで作『誕生』を制作した。

今回、「共生のひろば」への出展にあわせ、自然との「共生」のテーマでアレンジメント。タイトルは『共生…共に目覚めゆく時…』である。使用した植物は、シデコブシ・フキノトウ・ヤドリギ・ヤブミョウガ・ノキシノブ・ベニシダ類・ヘクソカズラの7種 (塚原) となっている。



▲「共に目覚めゆく時」

Ⅳ. 『ぼくんちのおさかなずかん』制作による魚類への興味喚起と各種連携への発展 (田中一秀)



絵画における重要な効果のひとつに、コミュニケーション・ツールであることが挙げられる。田中の作品は、その対象として特に子どもを意識して制作が開始された。現在では、2つの大きな役割を果たすようになりつつある。

1つ目は、本来の目的である、「子どもたちとのコミュニケーションの道具」として、また、「楽しみながら学びへとつながっていく教材」としての役割である。田中の絵は親しみやすく、「自分が気になったこと」や「自分が学んで感動したこと」が絵のベースとなっており、そのままビジュアルでどう伝えるか、ということに主眼が置かれている。技巧に走りすぎずパワーを生かした作品だ。

もう1つは、どうにかして多くの人に情報を伝えたいと願う専門家とのコラボレーションである。田中作品は、一言でいえば、理屈抜きに楽しく、対象を好きになる絵である。魚を中心とする海の生き物たちを、形態のデフォルメや表情の擬人化によって、より多くの人に親しみやすくする一方で、それを願う研究者やダイバ

ーたちとの交流を深めるツールともなり、自分もまた、より深い学びを得ていく。その成果の第1弾として、この2月に初のコラボ作品『ぼくんちのおさかなずかん 富山県滑川 (なめりかわ) コラボ』を制作。富山湾を遊泳するダイオウイカを撮影したダイバーの木村昭信さんとのコラボレーションである。現在、「うみむすび対馬」「カブトガニ保護プロジェクト」(これはいずれ三葉虫プロジェクトへもつながる予定)、「サメ・プロジェクト」なども同時進行中である。



▲遊泳するダイオウイカ撮影者の木村昭信さん (左) と田中一秀

V. 現代日本画『渦』に見る孔雀石と藍銅鉱などの鉱物顔料 (出口友佳子・永田利光)



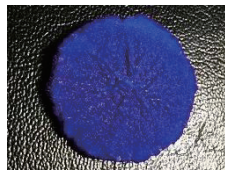
出口は海辺で育ち、ダイビング経験もある。愛知県立芸大生時代から海をテーマに、水中の泡や、ゆらめくイソギンチャク、海岸の貝殻などをよく描いていた。そのことから、2014年に岐阜県博物館の「ひだみの古生代の記憶—生命の進化と大量絶滅」展に合わせ、岐阜県大垣市赤坂にある金生山の化石をもとに約2億9000万年前の古生代ペルム紀後期の生物群の復元画を描き、ポスターやフライヤーとして全国へ配布された。

本稿掲載の日本画『渦』は藤田の所有作品だが、岐阜県博物館に、鉱物の企画展にあわせて貸し出したものである。出口はモチーフにより海を表現した具象作品も描くが、抽象作品にも取り組む。この作品は「抽象で」と依頼したものだが、「渦」がテーマであると同時に、「渦」から「アンモナイト」へと連想し、そのイメージを重ねてみたという。

使われた主な顔料は、緑が緑青(孔雀石 Malachite)、青が群青(藍銅鉱 Azurite)だ。両者はよく似た成分で、藍銅鉱に加水して炭酸が抜けると孔雀石に変わることがあるという。赤は水銀の原料ともなる辰砂(Cinnabar)とベンガラ(酸化第二鉄、酸化鉄赤 Red Iron Oxide)を併用した。また、白は胡粉で、貝殻から作られる炭酸カルシウムが主成分である。桃色としてサンゴを粉末にした顔料、珊瑚末も使用している。これらの顔料は砕かれた粒の大きさで色の濃さは、小(薄い)→大(濃い)とバリエーションをなす。美しい石(コレクションの幅がバラエティに富み過ぎていてこのようにしか表現できない)のコレクターである永田所有の孔雀石・藍銅鉱・辰砂の鉱物標本を掲載する。



●孔雀石



●藍銅鉱



●辰砂

まとめと考察 <今後の展開～『百科』のめざすもの～>

以上、『百科』掲載のものも掲載していないものも合わせて、創作活動の事例を5つ挙げたが、いずれも自然を起点として生まれ、制作者の想像力によって、より大きく世界が広がっていく作品群である。そして、単独ではなく、異分野の人と関わること(コラボレーション)で、単体では得られない効果を生み出す。1+1=2ではなく、3にも5にもする一種の錬金術的なものを感じる。これが創作のなせる技なのだろう。冒頭のコクトーの詩には、もうひとつ「この詩を読む人」が存在し、貝殻を見ただけでは得られない感動と共感そして世界観が、詩という作品になって提示されることにより、より広がりが増幅されて、鑑賞者それぞれの身に迫ってくるのである。

自然科学の分野だけを見ていては、モノとしての認識にとどまり、人間の心のヒダの奥深くに滑りこんでいきにくい事象であっても、ヒトの思考をいったん通り、それをモチーフにして、ヒトの手による創作活動から生み出された作品は、当事者以外の人たちの共感を生んでいく可能性が高い。なぜなら、そこに感動というエッセンスが付加されるからである。『百科』では、それが誌面であろうと無形のイベントであろうと、この感動というものの存在を重視していきたい。そして、そうであるからには、その対象・事象に誠意をもって対峙していくことが肝要だと考えている。



【出展メンバー】※藤田敦子：各務原市社会教育指導員，百科編集長 ※林隆一：岐阜県美術館，二紀会，画家・造形作家 ※北尾真澄：フラワー・アレンジメント師範，M.K Naturally 主宰
 ※塚原寛裕：自然環境調査員(植物相・植生) ※田中一秀：ずかんくん，金生山化石研究会
 ※出口友佳子：私立中高美術専任講師，日本画家 ※永田利光：土木設計，楽天ブログ石の王国管理人
 ※今尾真也：さかだちブックス，一般社団法人かかみがはら暮らし委員会理事